

# 火の民俗

な  
ら

## 民俗通信

□238□

### ■ナトリウム灯 ■

道路やトンネルで、オレンジ色のナトリウム灯に出合うと、何か静謐(ひつ)で心安らぐものを感じる。このオレンジ色の空間は、焚(たき)火を見つめている時の気持ちを、連想させるのではないかと私は思っている。

長年、屋久島に住んだ東京生まれの詩人・山尾三省(1938~2001年)は、奈良から訪れた親しい友人を五右衛門風呂を焚いてもてなし、「火を焚きなさい」という隨筆を書いている。

三省は「火を焚くことができれば、それでもう人間なんだ」火を焚きなさい。人間の火を焚きなさい(中略)やがてお前達が大きくなつて、虚栄の市へと出かけて行き、必要なものと必要でないものの見分けがつかなくなり、自分の価値を見失つてしまつた時、きっとお前達は思い出すだろう。すっぽりと夜につつまれて、オレンジ色の神秘の炎を見詰めた日々のことを」という。

△火の文化

火はプロメテウス(先を見るもの)が、神から盗み取つて人に与えた、とギリシア神話は伝えているが、この火の世界は多様である。まず煮炊きや明かりなど「熱源」や「光源」や「動力源」として暮らしに利用する「生活の火」の分野がある。長い間、人類は火を、暮らしの中

で効果的に使いこなしてきた。驚くべき威力を内包した火は、火に対する信仰を背景とした「祭礼・行事の火」の世界をも形作ってきた。神事のための火、盆や正月などの年中行事における火の問題である。しかし、火は人類に利益をもたらすばかりではなく、「災いとしての火」の場面も数々もたらしてきた。

また人々の関心をそそる人玉碑が無言で建ち並び、凄絶な過去世が凍りついたまま剥(む)き出しているような気がした。

・ジャンジヤン火・狐火などの「怪しい火」もある一方で、夏の楽しい花火にもなる。さらにこうした火にかかる具体的な

モノの世界がある。コクマ、シリ、朝には横網町公園を散歩したり、公園の中の東京都復興記念館を訪れるなど、この付近は関東大震災で家財道具を持つて避難して送る。御所市茅原のトンドドを支えた松の杭は、掘り起され、民家の棟木(むねぎ)などに吊り下げる、火難除けとなる。

△火の行事

県内の火にまつわる行事は、盆と正月に多い。正月の神フクマルを迎えるときには、火を焚いて迎え、小正月にはトンドを

（まつ）られる祭壇でもあった。

かまどでは刃物を使つたり乗せたりしてはならず、また不浄のものを焚いてもいけないなど禁忌が多かった。その半面、幼児が夜泣きしたときには、鶴の絵をかいて逆さまに貼ると泣き止むとか、寝小便止め、虫封じ、メバチコなどにも頼られた。

檀原市地黄(じおう)のスヌケ行事は、深夜子供たちが野神に参る前に、かまどのススを身体に塗りつけるが、これも火の神の力で子供の身体を清めるためと考えられる。

かまどの火はケガレを嫌うた

## 災いと利益の信仰対象



往馬大社の火取り行事(県指定無形民俗文化財) 2014年10月12日撮影

り、朝には横網町公園を散歩したり、公園の中の東京都復興記念館を訪れるなど、この付近は関東大震災で家財道具を持つて避難してしまつた時、きっとお前達は思い出すだろう。すっぽりと夜につつまれて、オレンジ色の神秘の炎を見詰めた日々のこと

背後に、火に関する神話・伝説・昔話などの火世界が控えている。△かまど・いろいろ最近の暮らしには、マツチさえもう不要になつたが、かつては火は、家の暮らしと団欒(らん)の中心だった。

△かまどは、クドやへツツイと呼ばれ、家の内部の土間(三ワ)に築かれ、中でもオオガマは、三宝荒神(さんぽうこうじん)が祀

られた。安堵町では地元の歴史民俗資料館などで、トウシミ(灯心)作りの技術伝承を図っている。蘆草(いぐさ)の髓を抜き出し、乾燥させて、菜種(なたね)油に浸けると灯明となり、お水

取りなどの法会で今も用いられ

ている。火の民俗が本県でも連

綿と伝承されていることがよく

分かるが、火取り行事の行われ

る往馬大社で、昨年末から筆者

も加わって「火祭り研究会」が

発足した。

人間と火の関わりを多角的に

学ぶことで、行事を継続させる

力となり、同時に奈良における

火の文化と、これから暮らし

方を考える契機になればと思

う。

(しかたに・いさお)奈良民

俗文化研究所代表)